

遠藤周作『海と毒薬』論

——「トポス」をめぐる「手記」——

長 濱 拓 磨

はじめに

『海と毒薬』は、「文学界」の一九五七（昭和三十二）年六、八、十月号に連載され、一九五八（昭和三十三年）四月に文藝春秋新社より刊行された。同年第十二回毎日出版文化賞と第五回新潮社文学賞の二つの賞を受賞し大きな反響を巻き起こした作品である。戦時中に起った九州大学医学部生体解剖事件、いわゆる相川事件をモデルとして日本の戦争犯罪、ひいては日本人の罪意識を主題として描かれている。先行研究を見ると、主に「日本文化や風土の問題」、「神なき人間の悲惨」、「日本人の罪意識の欠如」の三つをめぐる議論されてきた。これら

の文学的課題は最初に山本健吉が提出し^①、現代に至る多くの論文の中で様々な角度から検討を加えられているが、主題に関する議論はこの三つにほぼ集約されているように思える。だがその一方で作品の構造や作品中における「手記」が持つ意味などに注目した研究は数少ない。影山恒男氏^③、細川正義氏^④、大田正紀氏^⑤、下山嬢子氏^⑥など数本が見える程度である。

そこで本稿では「手記」に注目し、作品の構造の見直しを図りたい。さらに、「悪の行われた場所」^⑦という「トポス」の問題^⑧も取り上げ、作品構造に潜む二項対立の問題など様々な問題も合わせて考察することとする。

一、「手記」の所在

まずは大まかな作品構造を示し、「手記」形式の所在を明らかにしていきたい。『海と毒薬』は「第一章 海と毒薬」「第二章 裁かれる人々」「第三章 夜のあけるまで」の三部で構成される。

第一章は、章番号のない部分（以下、「序章」と呼ぶ）と章番号のある「Ⅰ」～「Ⅴ」の二つに区分され、それぞれ「東京の新興住宅地に引越してきた会社員の〈私〉が、その地で開業している医師の勝呂の過去を知るに至るまでの経緯⁹」と、「戦争末期に勝呂やその同僚であった戸田が生体解剖に参加するに至るまでの過程¹⁰」が描かれている。まずこの「序章」が〈私〉の「手記」である。第二章は「Ⅰ 看護婦」と「Ⅱ 医学生」の二つの手記に続いて、「Ⅲ 午後三時」と一九四五（昭和二十）年二月二十五日午後三時の生体解剖手術当日に入る。視点人物は「Ⅰ」が上田ノブ、「Ⅱ」が上田剛、「Ⅲ」が勝呂である。

第三章の「Ⅰ」で生体解剖手術の様子、「Ⅱ」で術後

の様子が描かれる。「Ⅰ」の視点人物は戸田と勝呂の二人、「Ⅱ」では上田ノブも加えた三人が視点人物となり、「多角的視点¹¹」で描かれる。つまり、『海と毒薬』には、「序章」の〈私〉の「手記」、第二章の「Ⅰ」の上田ノブの「手記」、第二章の「Ⅱ」の戸田剛の「手記」という三つの「手記」が存在し、事件の外側から事件そのものを対象化し相対化する役割を担っているのだ。三つの「手記」は、執筆者も〈私〉、上田ノブ、戸田剛とそれぞれ異なり、執筆された時間も〈私〉の「手記」が一九五四（昭和二十九）年十月頃、上田ノブの「手記」が一九四五（昭和二十）年二月二十五日の事件後すぐ、あるいは数年後、戸田剛の「手記」が一九四五（昭和二十）年二月二十五日の事件当日、手術が始まる直前と推定され、三つとも異なる。

次に三つの「手記」の意味と役割について考えたい。

第一に「序章」の〈私〉の「手記」。序章が「手記」であることを初めて指摘したのは下山嬢子氏である。氏は、前出の論考¹²において、次の箇所を論拠として「手記」であることを示した。

時には自然気胸を併発させたりする場合もあるのは先にも書いた通りだが、そんな突発事故を起きなくとも、一打ちで針をしかるべき部分まで突き入れなければ患者が痛がる時があるものだ。

（傍線部引用者／『海と毒薬』）

重要な指摘である。「先にも書いた」というように、これが「手記」であることは明らかである。さらに、次の箇所も考慮すれば「手記」であることはより確かとなるろう。

：右側には煙草屋と肉屋と薬屋とが、左側にはソバ屋とガソリン・スタンドとが並んでいるのだ。そう
だ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。
洋服屋は、ガソリン・スタンドから五十米ほど離れた地点にひとつだけポツンと建っているのだが、なぜこんな辺鄙な所をえらんだのかわからない。

（傍線部引用者／『海と毒薬』）

冒頭部で〈私〉が西松原住宅地について説明している箇所である。「そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。」という語り口から、〈私〉が今語っている

という現在性が明らかであり、先ほどの「書いた」という記述を合わせると〈私〉が今書いている「手記」であることの確実性は増す。

〈私〉が「手記」を書いた理由は、「手記」の結末部が手がかりとなる。八月に西松原住宅地へ引越しをした〈私〉が近所の勝呂医師に診療を受け、さらに勝呂医師の過去の事件まで知ってしまう。そして〈私〉が勝呂医師に過去の事件を知ったことをそれとなく告げた時、勝呂医師はショックを受け、「仕方がないからねえ。」と呟く。その様子を見て〈私〉は、今後勝呂医師の治療を受けるかどうか迷う。この時結論は出ていないが、そうした混乱の中で、改めて勝呂医師との出会いを回想したのがこの「手記」であると推測できるからだ。

第二の上田ノブの「手記」は、最初から「手記」であることが明示化されている。例えば次の箇所である。

夫のことは今は忘れたいですし、彼との結婚生活も一つのことを除いてはこの手記に関係もありませんから詳しくは書かないようにしましょう。

（傍線部引用者／『海と毒薬』）

お産のことは今日、これを書いている間も思いだすだけで辛くなります。この手記を読んでくだされば、わたしが子供を持ってない女になったため、心にも人生にも罅がはいったことがわかってくださるでしょう。赤ちゃんはどうしたとか、わたしのお腹の中で死んでいたのです。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)
「手記」と出てくるのは他にも何箇所かあるが、この二か所だけでも十分に「手記」であることはわかる。問題は、「今」、「今日」書いているという現在性の問題と、「この手記」を書いている理由である。大田正紀氏は論考^⑭の中で、上田ノブの「手記」を「檢察自白調書・手記・上申書」とされているが、根拠は示されてなかった。だが、生体解剖事件に関する内容であることは確かである。上田ノブは事件に関与した原因を、過去の自分の体験に求めており、結婚、死産、離婚、ヒルダへの反発と順に自分の心の奥を探っている。^⑮ いずれにしろ事件後の内省である点に注意したい。

第三の戸田剛の「手記」は、事件直前まで書かれてい

た形跡がある。次の箇所である。

研究室の戸を開くと、既に戸田がこちらに背をむけて机にむかっている。勝呂の方にふりむきもせず、声もかけなかった。ひどく真剣な表情でノートになにかを書きこんでいる。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)
第二章の「Ⅲ 午後三時」で、生体解剖手術が行われる朝、研究室に入った勝呂が見た戸田の様子である。ここで戸田が書いているノートが「手記」であると推測される。しかも、内容から見ても事件の前であることは明らかである。「手記」の最終部には次のような言葉もある。(これをやった後、俺は心の呵責に悩まされるやろか。自分の犯した殺人に震えおののくやろか。生きた人間を生きたまま殺す。こんな大それた行為を果したあと、俺は生涯くるしむやろか) (『海と毒薬』)
戸田が事件への参加を問われた時に考えていたことである。戸田はこれまで様々な罪を犯して来た自分が良心の痛みを感じなかったことに疑念を抱いており、生体解剖という恐ろしい罪を犯したとき、果して良心が痛むのか

どうか実験のような気持で結局は参加を承諾した。この出来事を「一昨日」と記していることから事件前に書かれたことは確かである。

以上が、三つの「手記」である。これらの「手記」を除く他の部分は、勝呂を視点人物として事件に至る遠因であった大杉医学部長の死から、個室の田部夫人の手術の失敗、おぼはんの衰弱死、事件当日の様子、生体解剖事件直後の様子までが書かれており、ある意味で勝呂の「手記」的な様相を帯びている。このように『海と毒薬』における「手記」形式の重要性は明らかである。

二、「序章」の「トポス」

前述のように、「序章」は東京郊外の新興住宅地に引越した「〈私〉」が、その地で開業している医師の勝呂の過去を知るに至るまでの経緯^⑥を記した「手記」であった。内容を詳細に見ると、「序章」は二つの時間と二つの場所によって構成された「トポス」であることがわかる。まずはここから考えたい。

第一の二つの時間については川島秀一氏の指摘がある。

氏によると、『海と毒薬』は《過去》と《現在》という二重の時間によって構成されており、『《現在》』という時間をしめるのは「第一章 海と毒薬」のうちの「I」に入るまでのプロローグに当たる部分、全集本一四二頁のうちわずかに二〇頁にも満たない。」としている。つまり、『《現在》』が「序章」で、『《過去》』が生体解剖事件に関わる残り全ての箇所ということになる。作品全体の構成を考えた場合はこの通りである。だが、「序章」に限定した時間を考えると少しずれが生ずるように思われる。というのも、「序章」の中で『《過去》』が浮かび上がったのは、勝呂だけではなくガソリン・スタンドの主人、洋服屋、〈私〉の戦争体験という『《過去》』もあるからだ。ガソリン・スタンドの主人は、戦争中支に兵隊として行った。迫撃砲で火傷を負ったが、女性を強姦したり、男性を突き刺して殺したり、好き放題できたと言っている。洋服屋は、南京で憲兵としてあばれたことがあるという。つまり、南京虐殺に関わり、何十人もの人を殺したということが示唆されている。〈私〉は終戦前、鳥取の部隊に応召されたが、すぐに帰ったので、人を殺す事

はなく、内務班で上官に苛められただけであった。これらのことが伏線となり、勝呂が戦時中の事件に関わったことを〈私〉が知るに及び、大きな衝撃を受ける。

私はなにがなんだかわからなかった。今日までそうした事実をほとんど気にもとめなかったことが非常にふしぎに思われた。今、戸をあけてはいつてきた父親もやはり戦争中には人間の一人や二人は殺したのかもしれない。けれども珈琲をすすったり、子供を叱ったりしているその顔はもう人殺しの新鮮な顔ではないのだ。トラックが洋服屋のショールウインドーを汚していったように無数の埃が彼等の顔に積っている。

〔『海と毒薬』〕

ここで〈私〉は、勝呂の《過去》を知り、改めて《過去》において戦争で人を殺したことのある人々が、《現在》何もなかったように日常生活を送っているという現実に衝撃を受けているのだ。言い換えると、《過去》の罪を簡単に忘却できる日本人の罪意識の不在、ひいては人間の不思議に対する〈私〉の疑問が「手記」を書くに至るモチベーションとなっっているのだ。

また、「序章」の作品内時間となる《現在》は、一九五四（昭和二十九）年である。根拠となるのは美空ひばりの流行歌である。作品の冒頭部でトラックに乗っている「若い人夫」が歌っている「流行歌」として歌詞の一部が引用され、風呂屋でも「どこかでラジオの流行歌が聞えてきた。あれは美空ひばりの声である」としている。日常風景を彩る流行歌として紹介されているのだ。この歌は一九五四（昭和二十九）年五月に発売された美空ひばりの「ひばりのマドロスさん」である。この曲により美空ひばりは一九五四（昭和二十九）年度NHK紅白歌合戦に初出場を果している。「序章」の「八月」に「流行歌」として町のあちこちから聞えてくるのは当然と言えよう。〈私〉が九州のF市へ行ったときには「江利チエミ」¹⁸の名前が見えることから、《現在》が一九五四（昭和二十九）年であることは確実である。つまり、「序章」は一九五四（昭和二十九）年八月に「手記」が始まり、九月の終りに義妹の結婚式のため〈私〉が九州のF市へと出かけ、偶然に勝呂の《過去》を知り、帰京後の秋（十月頃）に勝呂にF市へ行ったことを告げ、〈私〉

が勝呂の下へ通院を続けるかどうか迷うところで終わっている。先にも述べたが、〈私〉の「手記」は、この終わった時点で書き始められたと推測される。

第二の二つの場所は、東京の西松原住宅地と九州のF市であり、色調や気候から対照的に描かれている。西松原住宅地は東京の郊外に位置し、東京まで新宿から電車で一時間もかかる「辺鄙な所」にある。白と黄色が基調で「雨の降らない日」が続いている。そもそも「序章」は「スフィングスの微笑」という題の短編であったため、この土地は砂漠のイメージで彩られている。国道をトラックが走り、「白い／黄色い埃」が舞っている。渴いた日が続き「陽がカットと路に照りつけている」。「砂漠のような土地」である。洋服屋のショールウィンドーにはスフィングスのような「白人の男子人形」が微笑をうかべている。対する九州のF市は「水の街」である。黒色が基調であり、〈私〉が滞在した数日間はずっと雨が降っていた。この街の雰囲気や臭さは勝呂医院と類似している。

水の街という話はきいていたが、その街の中心を流れる那珂川も真黒でドブ臭かった。その黒い水の

上に仔犬の死骸やふるいゴム靴が浮いていた。私は勝呂医院の庭や診療室の臭いを思いだした。

〔海と毒薬〕

白と黄色が基調である西松原住宅地において勝呂医院だけが暗い重苦しい雰囲気を持っていたが、そうしたものとF市の印象は重なるように描かれている。

このように対照的な二つの街で《現在》と《過去》を結びつけるのがF医大病院と病院から見える海である。〈私〉は義妹の結婚式で偶然勝呂医師の《過去》を知り、もっと詳しく知るために、わざわざ地元の新聞社を訪れ、当時の新聞記事を目にして事件の概要を掴む。さらには、F医大病院にも潜入し、勝呂の《過去》を追体験する。これはそのまま廃墟を好み¹⁹、何度も取材旅行を行い、人間の人生を追体験した作者の趣味が反映している。そして病院で勝呂の《過去》の重みを味わった〈私〉は屋上で海を見て救われる。

頭が痺れるような気持がしたので屋上にのぼった。眼下にはF市の街が灰色の大きな獣のように蹲っている。その街のむこうに海が見えた。海の色は非常

に碧く、遠く、眼にしみるようだった。

『海と毒薬』

F市が「灰色」で、街の中心を流れる那珂川も「黒い水」であったが、病院の屋上から見える海の色だけは「碧く」「眼にしみるよう」な明るい色であった。この色の対比は印象的に描かれている。しかも、屋上とは言え、F医大病院は生体解剖という「悪の行われた場所」であることに変わりはなかった。そうした「悪」や「罪」の蠢く中における唯一の救いが海であったことは興味深い。なぜなら、屋上から見える海という「トポス」こそ、タイトルの由来でもあり、『現在』と『過去』、『私』と勝呂をつなぐ鍵となるからである。

三、二つの「手記」の位相

前述の川島氏の論考²⁰では、『海と毒薬』が『現在』と『過去』という二重の時間によって構成されており、『現在』にあたるのが序章の部分であった。となると、序章を除く残りがすべて『過去』にあたる。ここも詳しく見ていくと、第二章の「I」「II」にある二つの「手

記」とそれ以外の二種類で構成されていることがわかる。二つの「手記」はそれぞれ、事件後（上田の「手記」）と事件前（戸田の「手記」）に執筆されており、残りは勝呂を視点人物として事件に至る経過が描かれていた。いわば、事件の外側と内側という二重構造なのだ。つまり、事件の内側が第一章の「I」→「V」、第二章の「III」、第三章の「I」「II」で、事件の外側が第二章の「I」の上田の「手記」、「II」の戸田の「手記」ということになるのだ。

二つの「手記」は、いずれも「なぜ事件に関わってしまったのか」という原因究明や弁明である。「手記」を書いている勝呂にしても事件の経過を描いた第一章の「I」→「V」を見ると、「なぜ事件に関わってしまったのか」という原因究明や弁明が全体に流れている。これらには明らかに『テレーズ・デスケルー』の影響が見てとれる。『テレーズ・デスケルー』はテレーズが夫の殺人未遂を疑われた裁判から帰る場面が始まり、テレーズが「ほんとうに夫を殺そうとしたのか」を自分の心の闇と対峙する原因究明を主要とする物語であった。上田、

戸田は「手記」を通して自分の心の闇と対峙して、勝呂は病院の屋上から見える海と対峙することで、自分の心の闇と向かい合っている。

まず上田の「手記」を見よう。「手記」は事件と関わることとなった夫との出会いから始まる。上田は二十五歳の時、F市の看護婦学校を卒業し、医大病院で勤務を始めた。その年の夏、病院で盲腸の手術をして入院していた夫と出会った。ここで重要なことは、『海と毒薬』に含まれる三つの「手記」がいずれも夏から始まっていることである。〈私〉の「手記」は、一九五四（昭和二十九）年八月の「ひどく暑いさかり」、上田の「手記」は一九四〇（昭和十五）年頃の夏、戸田の「手記」は一九三五（昭和十）年頃の九月といったとおりである。作品の中で事件が真冬の一九四五（昭和二十）年二月二十五日に発生したことになることと明らかに対照的に設定してある。ヒルダとの確執の始まりも「夏の夕暮れ」であり、離婚の原因となった夫の浮気は大連での「最初の冬」であった。

上田は満鉄の社員であった夫と結婚した。F市出張所

から大連本社へ移った夫に連れられ大連へ渡った。最初の冬、妊娠をしている間に夫は浮気をしていた。四月。満鉄病院でお産をしたが死産の上に子宮摘出を行い不妊の女となった。その後も二年間結婚生活を続けたが、離婚しF市へ帰った。F医大病院で再び勤務をはじめ、病院の近くに下宿をした。寂しさをまぎらわすために犬を飼った。そんな孤独な生活をしてきた「夏の夕暮れ」、
「四、五歳ぐらいの男の子」を見かけた。橋本部長とヒルダの子どもだった。思わず男の子に手を触れようとした瞬間、ヒルダに制止され口惜しさを感じた。ヒルダへの対抗意識はこの時から始まる。さらに、個室の患者（田部夫人）の手術で医者が全てかかりきりになっていた時、前橋トキが自然気胸を起し処置に困った。浅井助手の「どうせ助からん患者だろう。麻酔薬をうって：」という言葉に触発され、どうせ死ぬ患者だから注射を打ち死なそうと思ひ、注射器を準備する。結局、注射器を見たヒルダに激しく叱責され、のちには休職を言い渡される。その後、生体解剖手術に参加を要請された時、ヒルダへの対抗意識で参加を決めた。

次に戸田の「手記」を見よう。戸田も夏に始まり自分の犯した罪の数々を告白していく。この告白の内容について山本和が重要な指摘をしている。

「戸田の手記は、生体解剖のような極限事例に対する息抜きであるとともに、やはり準備をしているんですね。人を殺してしまっても何にも不安がない。

先生の標本の蝶を盗んで、嘘をつく。姦淫事件。こ
うやって数えてくると大体十戒の後の五つがあるんだな。」
(傍線部引用者)

十戒とは言うまでもなく聖書にあるモーセの十戒のことである。参考までに『カトリック要理』の十戒を示して戸田の罪と対応させると次のようになる。

- 第一 われはなんじの主なる神なり、われのほか、何者をも神となすべからず。
- 第二 なんじ、神の名をみだりに呼ぶなかれ。
- 第三 なんじ、安息日を聖とすべきことを覚ゆべし。
- 第四 なんじ、父母を敬うべし。
- 第五 なんじ、殺すなかれ。

↓〈戸田〉医大生の三年生の時、女中の佐野ミツに中絶手術を行い、胎児を殺した。

第六 なんじ、かんいんするなかれ。
↓〈戸田〉浪速高校の理科にいた夏休み、大津の従姉と姦通。

第七 なんじ、盗むなかれ。
↓〈戸田〉N中学の時、博物館の教師が大切にしていた貴重な蝶の標本を盗む。

第八 なんじ、偽証するなかれ。
↓〈戸田〉小学校五年生、夏休みの作文で嘘を書く。

第九 なんじ、ひとの妻を望むなかれ。
↓〈戸田〉浪速高校の理科にいた夏休み、大津の従姉と姦通。

第十 なんじ、ひとの持ち物のみだりに望むなかれ。
↓〈戸田〉N中学の時、博物館の教師

が大切にしていた貴重な蝶の標本
を盗む。

『カトリック要理』中央出版社、一九六〇・昭和三十五年三月）
山本和の指摘通りに「十戒の後の五つ」が戸田の罪と対応していることがわかる。これは重要な指摘である。これまであまり注目されることはなかったが、戸田の告白が聖書的な罪意識に基づいていることは確かである。そして、上総英郎が指摘するように、「彼は罪意識をこの作中の誰よりも強く求めようとして挫折しているのだが、それだけに神に近づいていると言えるのである」²³⁾。もちろんそこには、武田友寿が指摘する「倫理的」空虚さ²⁴⁾もある。つまり、本当に罪意識や良心の痛みを感じないのであれば「手記」を書くこともなかったし、生体解剖の手術後、再び手術室を訪れる行動も取らなかったからだ。

以上のように上田と戸田は「手記」を通して自身の心の闇と対峙しており、事件の外側からそれぞれの内面を照らしている。

四、F医大病院という「トポス」

繰り返すが、『海と毒薬』は三つの「手記」と勝呂視点の《過去》によって構成されている。《過去》の主要部分は、一九四五（昭和二十）年一月から二月の出来事であり、最後には事件の起った二月二十五日のことが描かれている。細かく言うと、第一章の「I」が一九四五（昭和二十）年一月、第一章の「II」から「V」が一九四五（昭和二十）年二月の初めから終り、第二章のIIIと第三章の「I」、「II」が一九四五（昭和二十）年二月二十五日の出来事である。勝呂が視点人物となり、F医大病院を舞台に物語が展開する。ここには第一外科と第二外科の対立や西部軍の介入を中心としてそれぞれの思惑が交差し、ぶつかっていく中で全てが生体解剖事件へと巻き込まれていく様子が描かれているのである。

これらの主な舞台となるのがF医大病院である。そこでF医大病院が持つ〈場〉の問題すなわち「トポス」について考えたい。ここには地理的空間と文学的空間の二つが存在している。

第一に地理的空間。医学部と病院とは街から二里ほど離れた田舎に位置している。そのため空襲を逃れて、病院自体は安全な場所となっている。屋上からはF市の街と海が見える。町が空襲のため日ごとに小さくなっていく様子や、様々な色に変化する海も見える。いわば、医学部と病院は街と海が相対的に見える位置にあるのだ。

〈私〉、勝呂、戸田の三人は屋上から街の様子や、海を見たりすることになる。

〈私〉が病院の屋上から見たF市の街は「灰色の大きな獣のように蹲っている」と暗いイメージだった。対する海は「海の色は非常に碧く、遠く、眼にしみるようだ」と明るいイメージだった。この対照的なイメージの違いは重要であろう。

戸田は屋上から海を見ることはない。もちろん見えてはいるはずだが、作品中では海鳴りの響きを聞くことはあっても、海を見たという記述はない。その代わりに、F市が空襲で壊滅的な被害を被っている状況や、断末魔の人間の叫び声を聞いている。「みんな死んでいく時代やせ」という虚無的な発言の根拠となっている。

勝呂は〈私〉と同様、屋上から街や海を見ている。戸田と一緒に街が壊滅的な状況に陥っている様子を見たり、「碧く光」ったり「陰鬱に動ずんだ海」を見て来た。その彼が生体解剖事件に巻き込まれ、手術後に屋上から海を見る。ここが最も大事な箇所である。

「そやろか。俺たちはいつまでも同じことやろか」
勝呂は一人、屋上に残って闇の中に白く光っている海を見つめた。何かをそこから探そうとした。

(羊の雲の過ぎるとき) (羊の雲の過ぎるとき)
彼は無理矢理にその詩を呟こうとした。

(蒸気の雲が飛ぶ毎に) (蒸気の雲が飛ぶ毎に)
だが彼にはそれができなかった。口の中は乾いていた。

(空よ。お前の散らすのは、白い、いろいろ、綿の列)

勝呂にはできなかった。できなかった……。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)
印象的な箇所である。ここで勝呂が一人で屋上にいる孤独な状況は、約十年後〈私〉が屋上にのぼり海を見た

ことと共通する。(私)が見たのは「非常に碧く、遠く、眼にしみる」ような海であったが、勝呂は「闇の中に白く光っている海」であった。ここでいう「闇」は戦争で誰も死んでいく暗い時代状況や運命を象徴しており、「白く光っている」ものとは、生命そのものであったり、罪のない純粹無垢な心を意味するだろう。勝呂はそうした罪や暗い運命に囲まれながら、「光」を「探そう」としていたのである。もちろん、病院そのものは生体解剖という「悪の行われた場所」となってしまっているが、屋上から見える海に救いの可能性を探したのである。

第二に文学的空間。生体解剖事件に至る様々な二項対立がここにはある。まず大前提として戦争がある。日独伊三国同盟対連合、日本対アメリカという対立である。この対立が空襲で街を壊滅状態に陥れ、米軍捕虜を生み出した。次に軍部と医学部という対立である。西部軍が病院内の権力闘争に介入することで病院内の対立が激化していく。病院の医師も大半が軍医として出征しており、病院に残った者と軍医となった者の間にも見えない対立をもたらしている。また、病院内でも医学部長の椅子を

めぐる第一外科の橋本教授と第二外科の権藤教授の間に対立がある。二人の対立はそれぞれの部下の助教授、助手、医学生や看護婦ばかりか担当患者にまで様々な影響を与えた。この状況に対して勝呂は、「おぼはんは柴田助教授の実験台やし、田部夫人はおやじの出世の手段や」と発言している。結局、橋本教授は医学部長の選挙を有利に進めようとして焦り、個室の田部夫人の手術に失敗し患者を死なせてしまう。大部屋のおぼはんも手術を受ける必要はなくなったが空襲の夜に衰弱して死んでいった。そして、勝呂と戸田の対立もある。普段は仲のよい二人ではあるが、医学に対する姿勢や生き方は全く異なる。戸田は「誰もが死んでいく時代」だから患者が苦しもうが死のうが割り切っている。対する勝呂は、「誰もが死んでいく時代」だから最初の患者である大部屋のおぼはんだけは生かそうとした。生体解剖手術への参加も戸田は自分の良心を試す実験の意味で積極的に参加を表明したが、勝呂はおぼはんが亡くなったため、「どうでもいい」投げやりな気持ちになり、はっきりと参加をすることも断ることもしなかった。手術中も戸田は一生懸

命手伝っているが、勝呂は壁にもたれて何もしなかった。二人の態度は正反対であった。一方、看護婦の間でも橋本教授の夫人であるヒルダと上田看護婦、上田看護婦と大場看護婦長といった対立があった。以上のような様々な対立が物語を動かし、最終的には生体解剖事件へと結びついていくのである。

五、〈私〉と勝呂

最後に作品の重要な視点人物でもある〈私〉と勝呂について考えたい。

「序章」の「手記」の語り手でもある〈私〉は平凡なサラリーマンである。終戦前、少しだけ鳥取の部隊に召集され、内務班の古参兵にいじめられた《過去》を持つ。《現在》は東京の郊外の西松原住宅地にマイホームを持ち、釘の間屋に勤め、毎日新宿から電車で一時間通勤をしている。昨年集団検診で肺の空洞が見つかり、気胸療法を受けている。結婚しており、妻は妊娠している。義妹の結婚式のために九州のF市へ行き、勝呂医師が関与した《過去》の事件のことを知った。以上が作品内で

〈私〉についてわかることである。〈私〉は平凡な生活への漠然とした憧れを持っている。次の二箇所である。

私はこれで病気さえ良くなれば倅せなんだと思うことがあった。子供もでき、平凡な倅せかも知れないが、それでいいのだと考える。 『海と毒薬』

義妹の主人になる男は背のひくい、善良そうなサラリーマンだった。私と同じように朝の新宿駅で電車を待っているあの無数の勤め人の一人である。やがて義妹も子供ができ、この男と何処か郊外の安い土地に小さな家を建てて私と同様、平凡な倅せを樂しめばいい。何もならないこと、何も起らないこと、平凡であることが人間にとって一番、幸福なのだと思は彼等をみながら、ぼんやりと考えた。

（傍線部引用者／『海と毒薬』）
こうして〈私〉は自分が幸福であると自分に言い聞かせているような側面を持っている。

対する勝呂医師もちょっと変わってはいるが平凡な医者である。〈私〉が見た勝呂医師は「医者者は四十位だろるか老けた感じのする男だった」と記している。終戦間

際、医学生だった勝呂医師は一九五四（昭和二十九）年の時点で三十五、六頃だと推定できるので実年齢より老けて見えたことになる。西松原住宅地に内科の医院を開業している。医院の庭にはよこれた子供の赤い長靴があり、犬小屋には犬はいなかった。妻は元看護婦で、子供を連れて東京へ出た。「赤い長靴」から子供は女の子であると推測できる。（ちなみに、「私」のもうすぐ生まれる子供も女の子の可能性がある。）勝呂医師は《過去》の一九四五（昭和二十）年ではF医大病院の第一外科で戸田と共に研究員をしていた。糸島郡に両親がおり、平凡な生活への憧れを抱いている。

：平凡でもいい、何処かの、小さな町でささやかな医院に住み、街の病人たちを往診することである。

町の有力者の娘と結婚できれば、なお良い。そうしたら、自分は糸島郡にいる父親と母親との面倒をみることもできるだろう。平凡が一番、幸福なのだと

勝呂は考える。（傍線部引用者／『海と毒薬』）

細川正義氏が指摘するように勝呂が抱いている夢は「町の有力者の娘」との結婚を除けば〈私〉と大差はない。

結局は看護婦と結婚することになるが、勝呂も戦争さえなければ「町の有力者の娘」と結婚できたかもしれない。

《過去》において、戸田と比較して頭が悪いと卑下しているが、《現在》において西松原住宅地ではちょっと変っているが、腕は悪くないと認められており、それこそ戦争さえなければ町の人に信頼される医者として平和に過ごせたかも知れない。このあたりは『沈黙』のキチジローの嘆きに共通するものがある。キチジローも平和な時代であれば篤実なキリスト教徒として平安な一生を送れたかもしれないのに、弾圧と迫害の時代に生まれてしまったせいで棄教者の汚名を被りながら惨めな一生を送らざるを得ないと嘆いていた。勝呂も戦争さえなければ平凡ながらも幸福な人生を歩めただろう。

問題はここで二人が口にする「平凡が一番」という言葉が、後の作品では主人公の父の俗悪性を示すものとして使われている点である。次の二作品である。

後年、父は口癖のように「平凡が一番倅せだ。何も起らぬことが一番、倅せだ」と言っていた。あれは母との生活にたいする反動だったのだ。十年間、母

にひきずりまわされたこの男は離婚後母との過去を忘れるためにも、手がたい、地味な人生だけを求めていた。何も起らぬこと。平凡であること。そして私が文学をやるうとした時彼が依怙地なまで反対したのは自分の息子のなかに再び母の面影を見つづけるのが不快だったからにちがいない。

（傍線部引用者／「六日間の旅行」／「群像」、一九六八・昭和四十三年一月）

父と生活して見て、僕は母が父となぜ別れたかわかるような気がしました。「平凡が一番仕合せだ。波瀾のないのが一番仕合せだ」そのような意味のことを父はたえず口にしていました。経営している会社の余暇には、盆栽をいじり、庭の芝生の手入れをし、ラジオの野球中継をきくような生活。僕の将来についても、安全なサラリーマンの道を選ばせようとする毎日、それは母と二人っきりで過したきびしい日常とは全くちがっていました。

（傍線部引用者／「影法師」／「新潮」、一九六八・昭和四十三年一月）

どちらも作者を匂わせる人物が主人公となっている私小説的な作品である。ここに登場する主人公の父は、激しく劇的な人生を歩んだ母と正反対の人物として造型されていて、「平凡が一番」として波風の立たない無難な人生を歩んでいる地味で平凡な人物である。遠藤周作の父・遠藤常久がモデルであることは言うまでもない。だが、これらはいくまでも小説であるので、父のことにことよせて作者自身の俗悪な部分を強調したとも考えられる。そうした意味でこれらの父親像と〈私〉や勝呂に共通性があるのは当然のことかもしれない。

以上のように、『海と毒薬』は、「日本文化や風土の問題」、「神なき人間の悲惨」、「日本人の罪意識の欠如」の三つを主題として、複数の視点人物、時間、場所が複合的にからまりあいながら「悪の行われた場所」であるF医大における「悪」の様相、「悪の行為」の実態、「場所」が持つ意味を浮かび上がらせた作品であると結論付けられる。また、作品舞台である西松原住宅地、F市、F医大病院はそれぞれ色彩のイメージを持つ「トボス」であ

る。さらに、文学的空間としての「トポス」をめぐる三つの「手記」が含まれており、「手記」形式が果す意味は大きい。

* 本文の引用は『遠藤周作文学全集』（新潮社）に拠った。

注

- (1) 『海と毒薬』に関する山本健吉の発言は次の四本がある。
- 一、山本健吉「らいぶらりー 神のない人間の醜悪さ 遠藤周作著『海と毒薬』」（『日本経済新聞』、一九五八・昭和三十三年四月二十一日）
- 二、山本健吉「文学直言―小説の中の文学的風土―」（『文学界』、一九五八・昭和三十三年六月）
- 三、山本健吉「神と人間性の追求を―遠藤周作氏に答える」（『読売新聞夕刊』、一九五八・昭和三十三年六月十二日）
- 四、山本健吉「新潮文学賞 選後評」（『新潮』、一九五九・昭和三十四年一月）
- (2) 管見の限り、書評、解説、論文、単行本収録記事などあわせると百十二本見つかった。これは遠藤作品では、『沈黙』、『深い河』に次いで三番目に多い。
- (3) 影山恒男『海と毒薬』の叙法と構造 状況と倫理への

一つの挑戦」『活水日文』35、一九九七・平成九年十二月）

(4) 細川正義『海と毒薬』論（『作品論 遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月、所収）

(5) 大田正紀「遠藤周作『海と毒薬』論(2)―描かれざる『恩寵』をめぐる―」（『梅花短大国語国文』、一九九八・平成十年十月）のち『近代日本文芸試論Ⅱ キリスト教倫理と恩寵』（おうふう、二〇〇四・平成十六年三月）

(6) 下山嬢子『海と毒薬』―〈語り〉のデイメンション』（『日本文学研究』、二〇〇三・平成十五年二月）

(7) 遠藤周作『海と毒薬』ノート―日記より―（『批評』、一九六五・昭和四十年四月）

(8) 拙稿「遠藤周作論―〈劇〉を生成するトポス―」（『昭和文学研究』、二〇一六・平成二十八年三月）

(9) 笠井秋生『海と毒薬』／『遠藤周作論』双文社出版、一九八七・昭和六十二年十一月）

(10) 注(7)に同じ。

(11) 玉置邦雄『海と毒薬』の世界』（『人文論究』21(4)、一九七一・昭和四十六年十二月）のち『現代日本文芸の成立と展開』（桜楓社、一九七七・昭和五十二年十月）所収

(12) 注(6)に同じ。

(13) 次の二箇所がある。いずれも「今」書いている事実が強調されている。

それから二年後、わたしは夫と別れました。別れ話を持ち上がった時、わたしも人並みにわめいたり

泣いたりしましたが、そうしたくどい経過を書くのは、この手記を長くするだけですから省くことにします。ふしぎなことですが、あの二年間のことで特に思いだすことはほとんどないのです。今、強いて想いだそうとしても、眼に浮び上ってくるのは彼の白い体が益々、肥えはじめたこと、彼が血圧を気にして毎日「ベルゲール」という茶色い液体の薬を飲んでいた姿ぐらいです。 (『海と毒薬』)

(14) 注 (5) に同じ。
今更、この手記で弁解がましいことを書くのは嫌ですが、たしかにあの頃、橋本部長はわたしにとって職業的な先生という以外、なんの関心もない老人でした。(略)そして看護婦とよばれるわたしたちは下女のような役目をするのですし、そんな看護婦の一人にすぎぬわたしを橋本部長に結びつけるのは皮肉なことに彼の妻ヒルダさんでした。(『海と毒薬』)

(15) 既に多くの指摘があるように、上田ノブはフランソワ・モリーヤック『テレーズ・ドスケルー』のテレーズに似せられた人物として造型されている。ここではテレーズが夫を殺そうとしたのかどうか心の奥を探るように、上田も心の奥を探っている。

(16) 注 (7) に同じ。
(17) 川島秀一「遠藤周作ノート(二)―『海と毒薬』について―」(『山梨英和短期大学紀要』第21号、一九八八

年一月)のち『遠藤周作―愛の同伴者』(和泉書院、一九九三・平成五年七月)所収

(18) 美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみは当時同十七歳で、一九五五・昭和三十年には映画『ジャンケン娘』で共演し、「三人娘」と呼ばれた。

(19) 「廃墟の眼」(『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・昭和四十年七月)

(20) 注 (17) に同じ。

(21) 実際の相川事件は、一九四五(昭和二十)年五、六月にかけて生体解剖が行われており、作品中の二月二十五日午後三時という設定とは明らかに異なる。作者が意図して設定したと推測される。

(22) 山本和、北森嘉蔵、国谷純一郎、小川圭治「遠藤周作『海と毒薬』をめぐって」(『兄弟』、一九六〇・昭和十五年四月)

(23) 上総英郎『遠藤周作論』(春秋社、一九八七・昭和六十二年十一月)

(24) 武田友寿『遠藤周作の世界』(講談社、一九七一・昭和四十六年七月)で戸田の心の問題について次のように指摘している。

ぼくらが戸田のなかにはつきりみてとれるものは罪の意識もなく、罪の怖れもない「倫理的」空虚さである。

(25) 注 (4) に同じ。